

令和元年度（第63回）

岩手県教育研究発表会発表資料

国語分科会

主体的に学ぶ生徒の育成を目指した
中学校国語科の授業のあり方について

—ルーズブリックを学習者と共有することを通して—

令和 2年 2月 14日
岩手大学大学院教育学研究科
授業力開発プログラム
藤 森 崇 浩

要旨

本研究では、主体的に学ぶ生徒を「学習する目的を理解し、目標を持っている」、「学習の見通しを持っている」、「何が身に付いたのか自分の学びを自覚している」、「学んだことを生活や社会に役立てようとする」生徒と捉える。(答申を参考)本研究の目的は、単元の学習にパフォーマンス課題を位置付け、ルーブリックを学習者と共有する学びをつくることを通して、主体的に学ぶ生徒の育成を目指す中学校国語科の授業のあり方を検討することである。筆者は、中学校2年生において検証授業を実施し、授業記録、意識調査、言語活動の成果物等を用いて分析した。その結果、ルーブリックを学習者と共有することで、生徒の主体的に学ぶ意識の向上が見られた。

I 研究の背景

中央教育審議会答申(2016)では、子供たちの現状と課題について「学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの能力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていくという面から見た学力には、課題があることが分かる。」と述べられている。学んだことが社会で生かされる学びの有用感を感じられていないという指摘である。「学んだこと」が社会で生きるという実感のある学びをつくり上げることが求められている。筆者のこれまでの実践を振り返ったときにも、「実際に社会で使える力」と認識できる学びになっていなかったのではないかと反省するところである。また答申では、子供たちが「自己評価」を行うことの意義にも触れている。何ができるようになったのかを子供自身が自覚することが必要とされている。学習者にとって、「何ができるようになったのかわからない」学びからの転換が期待されている。平成29年度告示の学習指導要領では、「生きる力」をより具現化して「資質・能力」として示すと共に学習評価の充実が求められている。その評価方法の一つとして「パフォーマンス評価」が例示されている。パフォーマンス課題・評価(ルーブリック評価)を行う実践は行われ始めている。しかし、学習評価と生徒の主体性との関連について検討した研究は少なく、実践研究を通してその関連を明らかにする必要があると考えられる。

II 研究の目的

本研究は、単元の学びにおいて課題解決的な言語活動であるパフォーマンス課題を位置付け、ルーブリックを生徒と共有し、自己評価や相互評価として用いる学びをつくることを通して、主体的に学ぶ生徒の育成を目指す授業のあり方を検討することを目的とする。

III 研究の内容

1 中央教育審議会答申(平成28年)の整理

答申では、「資質・能力のバランスのとれた学習評価」を行っていくためには、「パフォーマンス評価」などを取り入れる必要があるとしている。「パフォーマンス」とは、国語科で「言語活動」として取り組まれてきたものである。また、答申では、「子供たちが自己評価」を行うことが適当だと述べている。筆者は自己評価のよりどころとなるのが、「パフォーマンス評価」における「ルーブリック」だと考えた。「ルーブリック」を用いて自己評価を行うことは、「自己調整」を行う上でも有用だと考えられた。

2 「パフォーマンス課題」「パフォーマンス評価」に関わる先行研究

「パフォーマンス課題（評価）」は、アメリカの「標準テスト」への批判をもとに生まれた。ダイアン・ハート（2012）によれば、標準テストは「再生や棒暗記」を求める。標準テストへの批判は日本の大学入試センター試験に対するものと同様のものと言える。

この標準テストに変わる評価方法として生まれたのが「パフォーマンス課題（評価）」である。ダイアン・ハートは、「パフォーマンス課題」を「生徒の理解力、複雑なスキル、思考を評価することができる」ものとし、「小テストのような課題から複雑な課題までを含む」としている。「パフォーマンス評価」は「現実的な状況や文脈で知識とスキルを使いこなせる能力を評価」するためのものとしている。

ハートの他に、「パフォーマンス課題」に言及しているのがウィギンズとマクタイ(1998)である。両氏は「逆向き設計論」というカリキュラム設計の方策を提案している。「逆向き設計」とは「求められている学習から逆向きに遡って導き出されたもの」としてのカリキュラムをつくることである。つまり、学習のゴールから逆算して、学びをつくる設計方法と言えよう。「求められる結果」が「思考力・判断力・表現力等」であれば、「パフォーマンス課題（評価）」を行うことが有効だと述べている。評価の際の尺度として「ルーブリック」をあげ、ルーブリックとは「パフォーマンスの成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語から成る評価基準表」だと定義している。

パフォーマンス課題の作り方を紹介したものとして、西岡（2016）がある。ウィギンズの「逆向き設計論」に基づいて、課題に必要な要素として六つの要素を提案している。

Goal（目的）	「何のために行うのか」
Role（役割）	「学習者の役割は何か」
Audience（相手）	「誰に対して行うのか」
Situation（状況）	「どのような状況を想定するのか」
Product（完成作品）	「何を作るのか」／Performance（実演）「何をするのか」
Standards（スタンダード）	「評価の観点」

西岡（2016）はルーブリックの作り方も示している。まず、「子どものパフォーマンスの事例」を集めて、「5つのレベル」で採点し、それぞれのレベルの作品群の特徴を「記述語」としてまとめ、ルーブリックを作成していく。

岩手県立総合教育センター（2018）は、「資質・能力」を育む手立ての一つとして「パフォーマンス課題（評価）」を提案している。その中で「ルーブリックの基本フォーマット」を示している。3の段階を「期待する姿」として、学習指導要領の指導事項に照らして、いわゆる評価規準とする。4の段階を「『3』に加えて、～ことができた。」、5の段階を「『4』に加えて、～ことができた。」とし、それぞれの基準を学習後に学習者が見せる姿を表す記述語として示している。

国立教育政策研究所（以下国研）は、全国の国立附属学校（小、中学校・中等教育学校・高等学校）144校のうち、50校がパフォーマンス評価を取り入れた実践をしていると報告している。総合的な学習の時間の他、国語科などでの実践も示されている。

以上のように、「思考力・判断力・表現力等」を発揮するために「パフォーマンス課題」を設定し、能力を評価するためのものとして「ルーブリック」を用いた「パフォーマンス評価」を行う実践が行われ始めている。

IV 先行実践から見える課題

国研の調査と県教育センターで紹介されている先行実践の課題を以下のように整理した。

1 資質・能力の評価と新たな評価方法

資質・能力の育成のための新たな評価方法が求められているが、実践例が周知されることと共に、実践場面でどう具現化していくかが課題である。本研究においては、中学校国語科の単元指導の場面で、「パフォーマンス課題（評価）」を位置付け、ルーブリックを共有する学びをどのように進めていけばよいのかを考えていきたい。

2 評価の妥当性・信頼性

評価の妥当性と信頼性を確保していくことは、目標に準拠した評価が求められて以降の普遍的な課題だと言える。本研究においては、「評価規準」の根拠を「学習指導要領（平成29年告示）」に求めた上で実践を考案していく。ともすれば「何を、どう評価されてきたか分からない」という思いでいた学習者と共に、「何ができるようになればよいのか。何が身に付けばよいのか。」そして、「どのように・どの程度」できるようになればよいのかを教師と生徒が共有しながら学びをつくることが課題である。

3 実現可能な学習と評価

資質・能力の育成に向けて、学習や評価の転換が図られている。その中で「パフォーマンス課題（評価）」が求められているが、教育現場からは「負担感」を指摘する声もあがっている。これまでの実践を活かしながら、これからの国語科の学習と評価をどうつくっていけばよいのかを、「日常的に」行うことができるという側面からも考える必要がある。

4 ルーブリックの設定と共有

『4』と『5』の境目がよく分からなかった」という学習者の声もある。授業者からは、設定や確認する場面の難しさについての指摘もある。ルーブリックをどのように設定するか。どう学習者と共有を図るのか。実践を通して考えていきたい。

5 ルーブリックを学習者と共有することを通して、主体的に学ぶ生徒の育成を目指す

内容ベースの学びから能力ベースの学びへの転換が求められている。その中では、目指す学びのゴールを共有（何ができるようになればよいのか共有）することが求められる。その手立てとしてルーブリックを学習者と共有することで、学習者にとってゴールが明確になり、学習後に何が身に付いたのかが明らかになると考えられる。学びの必然性や成就感を生むことで、主体的に学ぶ生徒が育てられるだろう。

V 検証授業について

1 実施目的

主体的に学ぶ生徒を育成するために、パフォーマンス課題を単元の学習に位置付け、ルーブリックを用いた評価活動を取り入れた検証授業を実施し、その有効性を検証する。

2 ルーブリック評価を位置付けた学習

- ① 課題に取り組む前に、ルーブリックの意義、方法等を共有する。ゴールを共有し、見通しを持つ。
- ② モデルレポートをルーブリックに基づいて評価することで、基準の共有を図る。「何が、どのくらいできるようになればよいのか」自覚する。
- ② レポート作成の際にも、ルーブリックを確認し、評価を目標として意識する。
- ③ 相互評価や自己評価にルーブリックを使い、「推敲のポイント」としても意識し、改善の手立てとする。ルーブリックを基に読み直し、次につなげる。（「形成的評価」）
- ④ ルーブリックを基に自己評価し、身に付いた力を自覚する。（「総括的評価」）

3 ルーブリックを共有することで期待される効果

- ① 【ゴールの明確化・見通し】ルーブリックを共有することで、ゴールが明確になる。
- ② 【学びの自覚化】「何ができるようになったのか」自覚することができる。
- ③ 【有用感】身に付いた力を社会や生活で生かそうとする。
- ④ 【学習と評価の一体化】「評価」を「目指す姿」として意識できるようになる。
- ⑤ 【自己調整】目標（評価）に照らして、レポートを見直し改善することができる。

4 単元の指導について

(1) 実施計画

【単元名】:「メディアと上手に付き合うために」はどうしたらよいのだろう 全7時間

【時期】:令和元年5月～6月 【対象】:盛岡市内中学校2年生4クラス 121名

(2) 実施概要

「メディアと上手に付き合うために」(光村図書「国語2」)を学習材とした。単元のパフォーマンス課題とルーブリックは以下である。

「パフォーマンス課題」筆者の考えと、新聞とネットニュースによる報道の違いについて調査して気づいたことをもとに「メディアと上手に付き合うためにはどうすればよいのか」メディアの特性を踏まえてレポートにまとめる。

単元の学習で用いたルーブリック

筆者の考えを捉え、メディアとの付き合い方について自分の考えを広げたり深めたりし、実際のニュースを基に、考えたことをレポートにまとめる。【思考・判断・表現】(評価規準)		
5	「4」に加えて、各メディアによる情報の伝え方の違いによる、情報の受け手への影響(受け手がどう思うか)についてふれながら自分の考えをレポートにまとめることができた。	「4」に加えて、～ことができた。
4	「3」に加えて、情報発信者の編集のねらいにふれながら、自分の考えをレポートにまとめることができた。	「3」に加えて、～ことができた。
3	調べたニュースを具体例とし、池上さんの考えを参考に、「メディアと上手に付き合うためにはどうすればよいのか」各メディアの特性をふまえて考え、レポートにまとめることができた。	(期待する姿)～ことができた。
3	文章を読んで理解した筆者の考えを基に、メディアとの付き合い方についての自分の考えをレポートにまとめることができた。	(不十分であるが)～ことができた。
1	レポートに自分の考えをまとめることができなかった。	～ことができなかった。

パフォーマンス課題に対するルーブリック評価を、前述2のように活用する場面を位置付けて実践を行った。単元のデザインと具体的なパフォーマンス課題は以下である。

V 検証授業 ～単元のデザイン～

The flowchart details the lesson structure:

- 第1次**: 複数の新聞の比較(必要性) モデル文と通してへ(見直し)
- 第2次**: 主張と例示との関係 メディアの種類と特性 (テキストとの対話) 学習者同士の対話
- 第3次**: 筆者の考え ルーブリック 評価基準を学習者と共有 (考えの形成) 評価を共有
- 4: 新聞とネットニュース報道の違い (字だけことを社会と繋げる)
- 5: 情報を基に、自分の考えを広げたり、深めたりして、レポートにまとめる (自分の考えを整理しまとめる)
- 6: ルーブリック自分の レポートを見直す (学びの自覚・自己調整)
- 7: レポートの交流 (ルーブリック、相互評価 推敲・最終、自己評価 学びの自覚を深めるための対話)

パフォーマンス課題

岩手日報2019年5月18日(土)2面「共同通信社配信」

池上さんの考えを参考 実際のニュース 調査 「新聞」と「ネットニュース」比較 報道の違いに気づく 各メディアの報道の「発信者のねらい」、「受け手への影響」 レポートにまとめる

(3) 検証授業の実際と授業記録からの考察

第1時には、岩手日報と全国紙の一面を比較した。五輪担当大臣が解任され、後任に岩

手県出身の議員が就任する記事がトップ記事であった。紙面構成や見出しの言葉に着目することで、新聞社による報道の違いに生徒は気づいていた。気づきをもとにして、「メディアと上手に付き合うためにはどうしたらよいのだろう」という単元の課題を設定した。

第3時には、教師が作成したモデルレポートを、ルーブリックを用いて生徒が評価した。評価の基準を共有するための学級での話合いの様子（抜粋）が以下である。

【「大津の園児交通事故」の報道について考えたモデルレポートの評価についての話合い】

T：評価で迷ったところはありませんでしたか。

C1：人々の悲しみが伝わってくるのところで迷いました。

T：同じところで迷った人はいますか？

C2：発信者が伝えたいことでもあるから、4か5で迷いました。（同様の意見多数）

【学級で評価の基準について話合いをし、基準を共有】以下はその確認内容

文頭に「視聴者には」という言葉をいれると、「視聴者への影響」だとはっきりわかるので、5と評価することにしよう確認されました。

ルーブリック（基準表）の記述語を読んだだけでは、明確にならない点についても、実際のレポートを評価し、評価について話し合うことで共有が図られたと考えている。そのことにより、生徒が学習の目標を明確にすることにつながったように見られた。

第7時は、ルーブリックを用いてレポートを相互評価したり自己評価したりした。学びを自覚することを意図した。その様子が以下。（C1がC2のレポートを評価している。）

C1：「～読者はもったいないと思うだろう。(5) グラフをのせた作者は、少しでも食品ロスを無くしてほしいというねらいがあるのかもしれない(4)」めっちゃうまいと思う。

C2：おねえーここひらめいたんだよ。エジソンの頭になったんだよ。

【C1は、ルーブリックに基づき記述を(5)、(4)と評価している。】

ルーブリックが評価基準として機能している。友達のリポートを叙述に即しながら、根拠を持って評価し合う様子が見られた。ルーブリックを用いて学習した感想の中にも、「評価の基準が明確になり、他人の評価や自己評価がしやすくなりました。」との記述が見られた。評価された生徒も、具体的な叙述を根拠として評価されるため、達成感が高まった様子だった。交流後、最後の推敲時間をとった。生徒はじっくりと読み直し、加筆修正していた。相互評価が、形成的評価として機能したと言えるだろう。

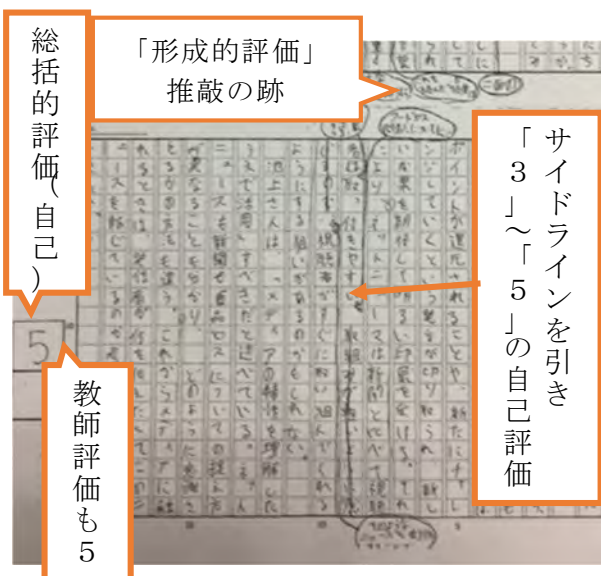
課題は、生徒が学習を振り返りながら、次の学びにつなげる自己調整の様子を可視化することである。それにより、主体的に学習に取り組む態度を見取ることにつながるだろう。

（4）生徒のレポートからの考察

《生徒のレポート》

レポートからは、ルーブリックを形成的評価に用いたことが見えてくる。レポートを読み直して、基準に基づいて改善していくためにはどう書き表せばよいのかを考え、推敲作業を行うことができている。作成段階で、自己評価や他者との交流や評価活動を行う手立てが、自己調整を促したと言えるだろう。

教師による評価も行い、コメントと共に生徒に返した。継続的に指導を行い、自己評価と教師による評価について生徒と話し合うことで、自己評価能力の向上につなげられるであろう。



(5) 意識調査からの考察

① 意識調査の結果と考察

主体性の変容を見るために授業前後に6件法で行った意識調査の結果を表1に記す。1,4は「学習する目的・目標の理解」,2,3は「学習の見通し」,5,7は「学んだことが役に立つ(有用感)」,6,8は「何が身に付いたか(学びの自覚)」についてたずねたものである。

表1 主体性に関わる意識調査 項目ごとの検定結果

質問項目	事前		事後		t 値	d f	p	効果量 d
	M	SD	M	SD				
1. 学習する意味	4.22	0.99	5.04	0.83	6.98	120	.000	.894
目的・目標 4. 「こんなちからをつけたい」という目標	4.15	1.38	4.79	1.04	4.05	120	.000	.520
2. 何ができるようになればよい: 理解	4.21	1.20	5.08	0.94	6.34	120	.000	.813
3. 学習の計画をわかっている	3.98	1.13	4.98	0.94	7.50	120	.000	.962
有用感 5. 社会や生活で役に立つ	4.98	1.01	5.19	0.95	1.70	120	.090	.218
7. 生活に生かそうとしている	4.04	1.11	4.81	1.13	5.33	120	.000	.684
6. どんな力が身に付いたかわかる	3.98	1.15	4.73	1.16	4.99	120	.000	.640
学びの自覚 8. 作文どのように評価されるかわかっている	3.31	1.33	4.99	1.30	9.95	120	.000	1.276

「5. 社会や生活で役に立つ」では、有意差が認められなかった。事前調査において、肯定的回答が多く(平均値は4.98),天井効果によるものと考えられる。

他の項目については、有意差が認められ、事後の方が高かった。意識調査の結果から、ルーブリックを教師と学習者が共有して学んでいったことで、「目的・目標」が理解され、「見通し」をもち、「学びの自覚」がなされ、「有用感」を持つことにつながったと言えよう。

「学びの自覚」に関しては、ルーブリックを用いて、相互評価や自己評価を行ったことが、「どんな力が身に付いたかわかる」ことにつながったと考えられる。また、「作文がどのように評価されるかわかっている」は事前において、肯定的回答率が最も低く、否定的回答率が上回った項目である。本実践では、ルーブリックの共有に加え、モデルレポートを評価し、話し合う活動を行ったことで、基準がより明確になったものと言えるだろう。

② 意識の変化と学力差との関係

次に、主体性に関わる意識の変化を学力差との関係から検討した。上位から下位までを四つの群(A1~A4)に分けた。その上で、群要因×事前事後要因の2要因混合計画による分散分析を行った。事前事後の要因については、意識調査の質問項目を、四つの分類「目的・目標」,「見通し」,「有用感」,「学びの自覚」に分け、二つずつの質問項目の得点を合計して分析した。各条件の平均と標準偏差が表2である。各条件とも、群要因は有意ではなく、事前事後要因は有意であり、事後の方が高かった。

「見通し(何ができるようになればよいか理解,学習の計画の理解)」については、群要因は有意ではなく、事前事後要因は有意であり、事後の方が高かった($F(1, 117) = 105.15, p < .01$)。「学びの自覚(身に付いた力の自覚,どのように評価されるかわかる)」についても、群要因は有意ではなく、事前事後要因は有意であり、事後の方が高かった($F(1, 117) = 137.02, p < .01$)。

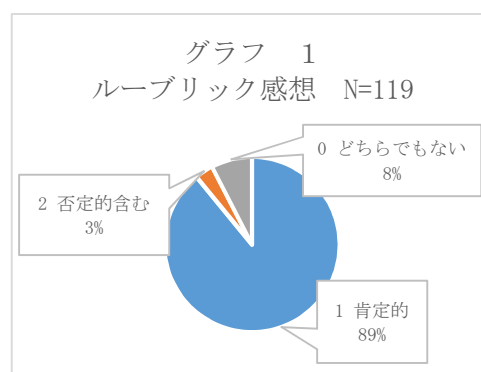
表2 授業前後の生徒の主体性に関わる意識の変化と学力差との関係

群		目的・目標		見通し		有用感		学びの自覚		n
		事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	
A1	平均	8.45	9.93	8.34	10.34	9.21	10.24	7.59	10.10	29
	SD	2.47	1.68	2.35	1.40	1.99	1.67	2.17	2.07	
A2	平均	8.17	9.79	8.24	10.00	8.83	10.00	7.10	9.90	29
	SD	1.91	1.56	1.85	1.41	2.07	1.97	2.07	1.77	
A3	平均	8.70	9.77	8.33	9.83	8.93	9.60	7.20	9.43	30
	SD	1.81	1.65	1.97	2.13	1.86	2.04	1.89	2.45	
A4	平均	8.18	9.82	7.88	10.09	9.09	10.15	7.27	9.48	33
	SD	1.93	1.55	2.00	1.54	1.62	1.60	1.78	1.92	

以上のことから、ルーブリックを用いたことによる「主体性の高まり」は、学力層との関連がないことが明らかになった。つまり、ルーブリックを学習者と共有して学習することは、どの学力層の生徒にとっても、主体性を高めることにつながると言える。

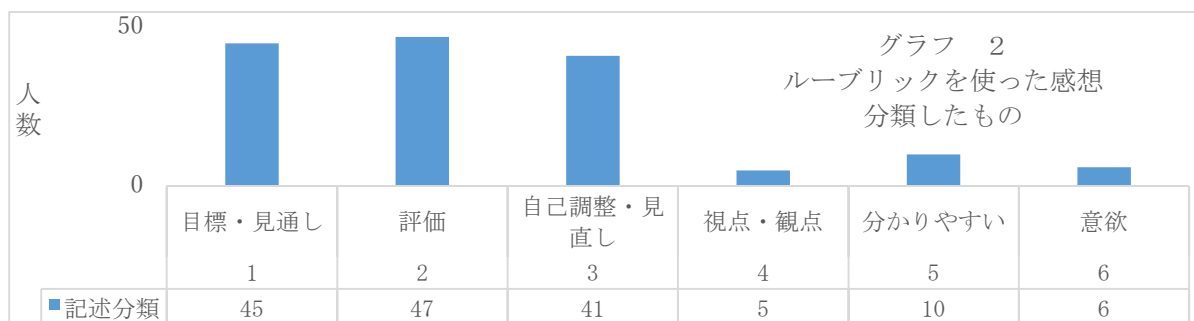
(6) 事後調査の自由記述からの考察

事後調査では、「ルーブリックを参考にしてレポートを書いたことについての感想」を自由記述で求め、119名の回答を得た。記述内容を分析した結果、ルーブリックに対する肯定的な回答は89%（106名）。否定的な内容を含む回答は3%（4名）。肯定か否定か判断できない回答は8%（9名）であった。グラフ1に示す。



4名の生徒がルーブリック評価を用いたことに否定的な内容を含む回答をした。「評価のために書いている気がした」という記述からは、ルーブリック評価が「評定」を付けるためのものと捉えられていることが伺える。評価はその後の自分の学習に生かすためのものであるという意義の共有が不十分だったという本実践の課題が見えてくる。また、「悪いところがないから良いという発想になるのかなと思った」という記述は、基準を共有する手立ての一層の充実を求めるものであろう。

106名の生徒は肯定的回答をした。記述内容を分析し、以下の六つに分類した。内容が複数の項目を含んだものは、複数の項目それぞれに数えた。「1 目標・見通し」「2 評価」「3 自己調整・見直し」「4 視点・観点」「5 分かりやすい・書きやすい」「6 意欲」以上である。グラフ2に示す（数字は人数を表す）。



45名の生徒が「目標・見通し」をもつ上で役に立ったと回答している。ルーブリックは、評価を共有することに加え、目標を明確にすることにつながったと考えられる。

47名の生徒が評価をする上で役に立ったと回答した。自己評価や他己評価をする際に役に立ったという記述が主なものである。ルーブリックは基準として機能したと言える。

41名の生徒がレポートを見直す上で役に立ったと回答した。ルーブリックが形成的評価として機能し、学習者が自己調整を図りながら学習をする上で役立ったのだと考えられる。

VI 研究のまとめ

1. 研究の成果

(1) 学習の目的, 目標の理解

意識調査で9割に迫る生徒が、身に付けたい力を理解して学習に取り組むことができたという回答をした。ルーブリックの共有に加え、モデルレポートを評価し、話し合い活動を行ったことで基準が明確になり、到達目標を明らかにすることにつながったと言えよう。

(2) 身に付けたい力と学習の計画への見通し

意識調査において、「何ができるようになればよいのかわかっている」と答えた生徒が増えた。身に付けたい力を明らかにし、ルーブリックによって評価基準が共有されたことが有効だったと言えるだろう。

(3) 学びの自覚

成果物を自己評価したり相互評価したりする際にも、視点、基準としてルーブリックが機能したことで、身に付いた力を自覚することにつながったのだと考えられる。

(4) 学んだことが生活に役立つという実感のある学び

意識調査や生徒の感想の分析の結果、生活に役立つという実感のある学びをつくることができたと言える。ルーブリックによって学びが自覚されたことに加え、今回のパフォーマンス課題が社会や生活とのつながりの深いものであったことが影響したと考えられる。

(5) ルーブリックを用いた形成的評価

レポートからは、ルーブリックをもとに、推敲したことが見て取れる。自己調整を促すためには、評価基準を明らかにし、自己評価や相互評価を行うことが有効だとわかった。

2. 本研究を通して見えてきた課題

(1) 主体的に学習に取り組む態度の評価への活用

本研究ではルーブリック評価を「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法として検討することはできなかった。自己調整の様子を見取る上で、ルーブリック評価は有効な手立てだと考えられる。今後、評価方法として検討することが求められる。

(2) 学習者の評価に対する理解

数名の生徒は、ルーブリックが「総括的評価」、あるいは「評定」のためのものというイメージで受け取っているように見られた。評価の意義を、生徒と共有することが、より主体的な学習者を育成することにつながるであろう。

(3) 学習者と評価基準を共有する手立てを充実させること

「ルーブリックについての感想」の中には、否定的な内容を含む記述も見られた（119名中4名）。その中には、基準の共有が十分に図られていないことによるものがあった。「ルーブリックの作成を生徒と共に行うこと」、「基準についての話し合いを一層取り入れること」、こうした学習者と評価を共有していく手立てを、さらに検討する必要がある。

参考・引用文献

- 中央教育審議会（2016）『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』．
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説総則編』東山書房．
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説国語編』東山書房．
ダイアン・ハート著（田中耕治監訳）（2012）『パフォーマンス評価入門 「真正の評価」論からの提案』ミネルヴァ書房．
G. ウィギンズ／J. マクタイ 西岡加名恵（2012）『理解をもたらす カリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』 株式会社 日本標準．
西岡加名恵編著（2016）『アクティブ・ラーニングをどう充実させるか「資質・能力」を育てるパフォーマンス評価』 明治図書．
岩手県立総合教育センター 教科領域教育担当（2018）『資質・能力の「三つの柱」を総合的に育む授業づくりガイドブック』．
国立教育政策研究所（2017）『資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書 5 資質・能力の包括的育成に向けた 評価の在り方の研究』．
光村図書『国語2』平成27年3月6日文部科学省検定済．
岩手日報2019年4月11日付け一面「共同通信社配信」岩手日報2019年5月18日付け二面「共同通信社配信」

岩手大学大学院教育学研究科（平成30年度入学）
藤 森 崇 浩

所属プログラム
授業力開発プログラム

担当教員 岩手大学大学院教育学研究科
准教授 田 中 成 行
特命教授 小 岩 和 彦

所属校
盛岡市立上田中学校